

---

# 王女と狼の騒動歌 改訂版

金城 ユウ

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

王女と狼の騒動歌 改訂版

### 【Nコード】

N8921C

### 【作者名】

金城 ヨウ

### 【あらすじ】

王女暗殺を依頼された殺し屋は、ホテルを抜け出してきた王女と知り合つて……この連載は、以前短編で投稿した「王女と狼の騒動歌」の改定、連載化したものです。

## 第一話 狼の前奏曲（プレリュード）

寂れた雑居ビルの一室で、俺はパソコンのキーボードを叩いていた。内容は浮気調査の報告書だ。何故そんなことをしているかというと、俺が表向き私立探偵で昨夜ターゲットの決定的瞬間を撮ることに成功したからだ。

「よし完了」

俺は報告書を印刷するように2世代ほど前の古いOSを積んだノートパソコンに命令するとタバコに火をつける。そこにドアがノックされた。タイミングがよいというか悪いというか。

「開いているよ」

我ながらやる気に無い声でドアの外に言うと、女が入ってきた。

ショートカットの黒髪の美人で、ブランドスーツをビシッと着こなしている。眼鏡のせいかわかな社長秘書という感じだ。間違ってもこんな雑居ビルの住人ではない。

「仕事よ。士郎」

入ってきたとたん女はそう言った。美人なのに色気も何もあつたものじゃない。

「とりあえず、コーヒーでも飲むか？」

俺はやはりやる気の無い声で女、仲介屋の速水真琴はやみまこに聞いた。

「暗殺の依頼？」

俺は、やる気さえ出せばそれなりに見える顔とたまに評される顔で、面倒くさそうに聞き返した。

「そうよ、暗殺の依頼」

物騒な内容なのに、真琴が当たり前のように答える。

「勘弁してくれ。昨夜までの浮気調査で眠い」

「いい仕事よ。人ひとり始末して500万。破格よ」

確かに破格な報酬だ。浮気調査の報告書さえ依頼人に手渡せば、抱えている仕事もないし断る理由もない。

「仲介屋のお前の取り分は？」

「そんなこと、どうでもいいじゃない」

真琴の顔に焦りの表情が浮かぶ。そちらのほうも破格らしい。

あまり高額を提示されると、踏み倒しや、二重依頼など、信頼できないのだが…… などと考えるが途中で面倒くさくなった。いざとなれば真琴にけじめを取ってもらえばよい。

「とりあえず、詳細を話せ」

俺はやはり面倒くさそうに言った。

「そのことだけ依頼人がここに来ているの。直接聞いてくれる？」

「おい！ この場所を教えたのか？」

「問題ないでしょ？ だつてここ探偵事務所だし」

能天気なことを言いやがる。そして真琴は依頼人を事務所に招き入れた。

「彼が殺し屋ですか？ ミス速水<sup>はやみ</sup>」

貧相な外国人男が値踏みするように俺を見る。陰険そうな三白眼の男で間違つてもお友達にはなりたくない種類だ。しかも脇に重たいものを吊るしている。

「ええ、彼が碧井士郎<sup>あおいしろう</sup>です。士郎、彼が依頼人のミスターバーゼルよ」

「まあ、よろしく頼む」

俺は、面倒くさそうに答える。真琴はそんな俺の態度に怒ったような視線を向けたが無視する。

「彼で大丈夫ですか？ ミス速水」

バーゼルの言い分も、もっともだろう。少なくとも闇の住人の雰囲気がつたくしなはずだ。感じるとしたら、うだつのあがらない2流…… いや3流探偵か。

「ええ、大丈夫です。私は彼以上の暗殺者を知りません」

言葉とは裏腹に、真琴の頬の辺りが引きつっているように見えるが、真琴ことを信頼しているのか、バーゼルはそれ以上は追及しなかった。

「では早速、標的は来週来日予定のシリア国王女、サラ・ブレングダです。成功報酬は日本円で500万。どうです？ 受けてくれませんか」

シリア王国は、王国制度を取り入れている小国で、主な工業、特産物はない。石油の輸出で成り立っている国だが、治安は安定している。

「何故、国王でなく王女が標的になるんだ？」

「王女が進める王国制から議会制民主主義への移行。成功すると困る人もいるということです」

そういうことであれば、真の依頼者は今の政治形態の中心にいる人間だろう。

「わかった、引き受けよう。だがいくつか条件がある」  
俺は細かい条件を切り出した。

**第一話 狼の前奏曲（プレリュード）（後書き）**

読んでいただきありがとうございます。

この時点で元作品と設定が変わってきています。と言っか主人公の設定が出てきたのっではじめて（笑  
新キャラも出てきているし。

次回はサラちゃんの視点からスタートです。

## 第二話 王女の序曲（オーヴァーチュア）

飛行機が着陸態勢に入る。窓の外を見ると眼下に日本の町並みが見えた。

「どうしたのだ？ サラ。そんなにそわそわして」

隣に座った父が、不思議そうに訪ねてくる。そんなに態度に出ていたのだろうか？ でも素直に答える。

「やっとお祖母様の故郷を、この目で見る事ができるのですもの。そうやっこの目で見る事ができる。お祖母様はこの東洋の島国から砂漠の国にひとり嫁いで来た、おそらく望郷の念もあったのだろうが、小さな頃から日本という国がどのような国か聞かされてきた。その日本に父が行くということが無理についてきたのだ。」

「やっ」と長年の願いがかなう  
私は呟いていた。

飛行機が無事着陸し、タラップを降りるとすごい数のマスコミの数だった。フラッシュがたかれまぶしい。にっこりと笑ってTVカメラに向かって手を振ると、さらに激しくフラッシュがたかれる。国王である父より私のほうにカメラが向いている気がするのは気のせいだろうか。

俺はフリーライターとしてマスコミの中に紛れ込んでいた。

「ほう、写真より美人だな」

それが、実物の彼女を見た感想だった。シーリア国王女、『サラブレンダ』。明後日で二十歳になる。王位継承者第三位で、確か祖母が日本人ということ。国王ともども親日家として有名だ。

今回の仕事は彼女の暗殺。依頼人は仲介屋の真琴が調べたところによると、王国の大臣らしい。王女の進める議会民主主義に移行す

るとその地位を追われるので、阻止したいというところだろう。だから暗殺というのもどうかと思うが、俺としては報酬さえもらえれば文句はない。

ちなみに依頼人として俺の前に現れたバーゼル氏は、シーリア王国の諜報機関の人間だそうだ。飼い主は国王でなく大臣らしいが。今回の来日は環境サミットに出席するため、サラ王女はそれに便乗して来日したということで、国賓扱いではないので宿泊も民間のホテルだ。

仕事のタイムリミットは明日の夜だから、時間的には余裕だなと俺はタバコをくわえた。

「あゝあ」

記者会見も終わりやつと部屋に案内された私は背伸びをした。やつと休める。と思っっていると侍従長のセバスチャンがやってきた。

「サラ様、こちらとこちらに目を通してください。それからドレスに袖を通していただきませんと」

「ちよつと待つて。首相との晚餐ばんはんまでは休めるのでないのですか？」セバスチャンは、「何を言っているのですか？」という顔をする。

「とんでもありません。明日の訪問先での挨拶そうごの草稿にも目を通していただかないといけませんし」

「ちよつ、ちよつと待つて」

セバスチャンの言葉をさえぎる。

「飛行機の中でも色々と仕事をやっていたのですよ。少しは休まないと身体が持ちません」

「はあ、しかしそれだとお時間が」

困った顔をするセバスチャンにダメ押しをすることにした。

「やだやだやだー！ 休むといったら休むのーっ！」

大きなソファアールに寝転がり両手両足をバタつかせる。しかし、セ

バスチャンは冷静だった。

「お見事な駄々でございますな。まあ、しょうがありません。お昼をはさんで6時までお時間を差し上げましょう。しかし晚餐の後には草稿に目を通していただきますぞ」

セバスチャンは呆れ顔だ。でも、基本的にセバスチャンは私に対しては甘い。ちゃんと許可はくれた。

「では、国王陛下のお側にいますので、何かあったらご連絡ください」

そう言っ退出するセバスチャンに「大好きよ、セバスチャン」と声をかけると難しい顔が少しだけほころんだ。

そして私は、扉を閉めたセバスチャンに「ごめんなさい」と両手を合わせた。

第二話 王女の序曲（オーヴァーチュア）（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

サラたんの登場です。

ネタばれやりますと、駄々をこねるシーンは新潮社『コンシエルジュ』の10巻64話TokyouHolidayよりパクリです（笑）あのシーン見てサラのイメージにびったりだったので使っちゃいました。

今回はついに王女と狼が出会います。

たぶん今夜辺りにはUPできるかと思えます。

漫画のタイトルが間違っていました。1月30日に修正です。

第三話 王女と狼の世俗歌（シャンソン）

やるなら狙撃がベターだろうか。俺は、ホテル前の広場から見えるビルをひとつずつチェックしていく。

「あの一、よろしいですか？」

後ろから誰かが話し掛けてきた。人に背後を取られるなんて久しぶりだ。相手が同業者なら俺は血塗れで転がっていただろう。振り返ると、黒いロングヘアで薄いサングラスをかけた女性が立っていた。

まるでその辺にいる外国人観光客のような姿をしていたが、間違はなく今回のターゲット、サラ・ブレнда王女だ。彼女に付くはずの護衛の姿はない。一瞬、畏じやないかうたがった。

「サラ王女？」

「気が付かれちゃいましたか。記者さんですよ。空港からずっと付いてきていたでしょう？」

「あ？ はい、そうです。フリーライターの碧井士郎あおいしろうと言います。勘違いしているなら好都合。適当に話をあわせる。」

「王女様。一人での外出は危険だと存じますが」

俺は、心にも無いことを言う。チャンスだ、面倒にならないうちに始末するに限る。

「どうしても生の日本が見たくて抜け出してきました。公式訪問だと作った顔しか見せてもらえなくて、つまらないですから。それから私のことはサラと呼んでくださいお願いします」

そう言っつて無邪気に笑う。この王女様は、自分の立場をわかっているのだろうか？ その身に何かあれば一人、二人の首は軽く飛ぶだろうに。

俺は左脇に吊るした愛用の拳銃『CZ75』に手をかける。

「あの…… 今日一日付き合ってくださいませんか？」

自分から狼を引き込むとは『こいつは馬鹿だ』と、俺は王女をそう評価した。

「どこかお望みの場所がありますか？」

俺はサラに尋ねた。

寿司、天ぷら、芸者ではないが、「お寿司が食べてみたいですよ」

と言う、サラのリクエストで寿司屋に入った。ただし回っているが、「本当に回っているんですね」

サラがうれしそうに笑う。まあ、寿司だけでなく天ぷらや、ケーキや、プリン、フルーツなども回っている

何度も来日した日本通なら別だが、一般の外国人には本格的な店よりはこのような店が喜ばれるようだ。確かロンドンでも回転寿司が出店したと聞いた覚えがある。

「あ、あの碧井さん。どうやって食べたのかしら？」

「自分で好きな皿を取って、醤油をつけて食べてください」

するとサラはおそろおそろベルトコンベアーの上を流れる皿を取ると、うれしそうに笑う。二十歳前の女性に言うのもなんだが、その仕草が可愛らしい。

「おいしい。これは何という魚ですか？」

「ああ、それはヒラメだ」

日本人の血が入っているせいか生魚も大丈夫なようだ。サラは食べては魚の名前を聞いてくる。

そのうちに俺がチビリチビリやっている日本酒に興味を持ったよ  
うだ。

「碧井さん。それも少しください」

「日本では飲酒は二十歳を過ぎてからだ」

とたんにサラが拗ねた。公式の場所とは違いよく表情が変化する。今がサラの本質なのだろう。

「碧井さんは意地悪です。シリアでは18歳で飲酒できます。二十歳まで待つと帰国する日になってしまいます」

「どうもこのままだと恨まれそうだ。俺の目的を考えると、どの道恨まれることにはなるのだが……俺はお猪口に注いだ日本酒をサラの前に置いた。とたんにサラの顔が輝いた。」

「いいのですか？」

「まあ、いいさ。日本には数え年というのがあるから、サラは21歳ということしておく」

笑顔のサラは、お猪口の日本酒を一気に煽った。するとみるみるまに顔が桜色に染まっていく。

「お、おい大丈夫か？」

「碧井さん、私、初めてお酒を飲みました」

今頃になって白状するな。俺はあわてて店員にお冷を頼む。

内心、一体俺は何をしている。という思いもあるが、もう少し付き合ってもいいだろう。どうせ今日一日の命だ。俺としてもこのまま帰すつもりはない。

第三話 王女と狼の世俗歌（シャンソン）（後書き）

今回も最後までお付き合いありがとうございました。

第三話 王女と狼の世俗歌（シャンソン）をお届けします。

もうお分かりだと思えますが、今回のサブタイトルは曲のカテゴリを絡めていこうという趣向です。

では次回もよろしく願います。

第四話 王女と狼の協奏曲（コンチエルト）

私はたぶん幸運なのだろうと思う。ホテルを抜け出してすぐに、こんな親切の人に出会えたのだから。

碧井士郎あおいしろうさんという人はきりつとしたハンサムではない。なんとなく時代劇に出てくる浪人のような印象だ。気だるげな雰囲気こそ感じさせるかもしれない。そしてまだ一時間ほどの付き合いだけど、とても優しい人だと言うこともわかる。だから、もう少し甘えてしまうことにした。

「あ、あの碧井さん」

「どうしました？」

「あの、お願いがあるのですがいいですか？」

「ええ、どんなことですか？」

不思議そうな顔をする碧井さん。

「腕を貸していただけませんか？」

「腕ですか？」

私は碧井さんと腕を組む。

「前から一度こうやって男の人と歩いてみたかったんです」

碧井さんは空いている左手で頬をぼりぼりと搔いた。どうもそれが碧井さんの照れたときの癖らしい。

「さあ、行きましょう」

私は組んだ碧井さんの腕を引つ張って歩き出した。本当に碧井さんのような人が恋人だったらいいのに…… 実際にはいろいろあつて無理だけど、思うだけなら自由だから、今だけは……

「あつ、この映画、見てみたいです」

腕を組んでから、やたら上機嫌なサラが言った。タイミング的に

は後10分ほどで次の上映だ。

確かハリウッドの映画で、殺し屋が雇い主を裏切ってターゲットの女性を守り抜くといったストーリーだ。背中を嫌な汗が流れる。

「映画でいいの？」

動揺を隠しサラに聞いた。

「はい。シーリアってアメリカの映画はあまり入ってこないのに、にぱっと明るい笑顔で答えるサラ。この様子だと俺の正体がばれているわけではないようだ。

「では参りましょうか姫様」

少しだけおどけて言うサラは笑顔で「はい」と答えたのだった。

夕暮れ時、俺とサラはお台場海浜公園まで足を伸ばしていた。

目の前には、急速に明るさを失っていく空をバックに、ライトアップされたレインボーブリッジが見える。

「きれい……」

「そうだな」

サラは俺と腕を組んだままレインボーブリッジを眺めている。周りには同じようにレインボーブリッジを眺めているカップルが何組か見える。

「もう時間が無いですね。でも帰りたくないです」

「……」

俺は何も答えなかった。サラをこのまま返すわけにはいかない。

俺は殺し屋でサラの暗殺を受けている。数時間が彼女を葬るチャンスだろう。明日以降だと警備の厳しい中で実行しなければならぬ。でも俺はサラを殺したくないと思いついてきた。彼女の進める民主化政策は、本当に国のためを思っていることだろう。それを一握りの為政者のために彼女を殺してまで止めるようなことだろうか？

こんな当たり前のデートコースでさえ、無邪気に喜んでくれる彼女

の笑顔を壊してでも止めることだろうか？

俺は内心舌打ちした。考えるな。俺はプロの殺し屋、それだけだ。自分に言い聞かせる。いつものように銃を抜き、引き金を引けば

「碧井さん？」

サラと呼ばれて現実に戻る。

「あつ、ごめん。考え事していた」

「ひどいです。私をほうっておいて何を考えていたのです？」

「うん。サラを返したくないなと思っていた」

そう言った俺を見て、サラの顔がオレンジ色に染まったのは夕日のせいだけではないはずだ。

第四話 王女と狼の協奏曲（コンチエルト）（後書き）

今回もお付き合いありがとうございます。

デートもそろそろ終わりに近づきました。その果てに待つ結末は？  
と言っても短編をよんでくれた人にはバレバレですけどね。

次回は、第五話 王女と狼の遁走曲<sup>フーガ</sup> でお会いしましょう。  
たぶん明日の真夜中（23日未明）の更新になると思います（

第五話 王女と狼の遁走曲（フーガ）

最後にコンサートホールへサラを誘ったのは、サラを殺す決心が付かなかったせいだ。これでは殺し屋は廃業しなければならない。

今まではサラのリクエストに答える形で、都内を回ってきたのだが、俺のほうから誘ったことにサラはすごく喜んだ。だが、俺はその笑顔を見て胸が痛む。

「チャキッ！」

俺が『第九交響曲』の歌声響くコンサートホールの中で、その音を聞き取ることが出来たのは偶然ではない。俺にとつて聞きなれた初弾を装填する音、セミオートガンのスライドをひく音だ。

仲介屋の真琴の話では、シーリア王国の内情は安定している。暗殺を狙うのはバーゼルたちぐらいだという話だ。ということは、依頼人は俺を信用していなかったようだ。殺し屋を二重依頼するとは

……

「チッ」

舌打ちと共にサラを引き寄せた。同時に銃声。サラの前に座っていた男が腕に被弾した。多分、命に別状は無いだろう。

おそらく俺の顔には笑みが浮かんでいただろう。先に裏切ったのは依頼人だ、俺にはサラを殺す理由がなくなった。全力でサラを守ることができる。

俺は懐のCZ75を引き抜き、天井に向かって三発威嚇射撃をする。

銃声を聞いても伏せると言うことを知らない日本人だ。敵の放った一発目の銃声で呆然としていた人々が、俺の威嚇射撃で現実を引き戻されパニックに陥り我先に出口に殺到する。俺はサラの手を引きその人波に紛れ込んだ。

「こっちだ！ 走れ！」

「は、はい！」

俺はスタッフオンリーのたて看板を蹴っ飛ばし、扉のカギを閉める。時間稼ぎにはなるだろう。

狭い通路をサラの手を引き走る。出演者専用の出入り口から脱出するつもりだ。

しかし、出入り口の前には拳銃を手にした男がいた。男がこちらを認識するより先にCZ75が火を吹く。弾丸は男の親指に当たり、拳銃が床に落ちる。かわいそうにこれからは、普通の生活をするにしても不便な思いをするだろう。しかし、容赦はしない。蹲る男の顎をけりあげると、男は崩れ落ち動かなくなる。俺は男の懐から予備のマガジンと床に落ちている銃を奪う。『グロツグ18C』高性能のマシンピストル。こいつら、街中で銃撃戦でもやらかすつもりか？

「さあ、行くぞ！」

ドアの外に誰もいないのを確認して、サラの手を握り俺は路地を走り出した。

「はあ…… はあ…… これじゃ、昼間見たアクション映画の主人公とヒロインみたいだな」

俺とサラは廃屋と化した病院に隠れている。あの後何人かの敵を倒し装備を奪った。

「あの…… 私が狙われているのですよね？」

「ああ。サラは俺の正体にも気がついてるだろ？」

「はい……」

二人ともずいぶん息が切れている。こんなに必死に走ったのは久しぶりだ。お互いしばし無言になる。落ち着いてきた頃にサラから嗚咽が聞こえた。

「サラ？」

「ごめんなさい…… 私のせいで…… 本当にごめ……」

俺はサラを抱き寄せた。涙に濡れたサラの碧眼が俺を見つめる。  
「大丈夫。俺がサラをいるべき場所に帰してやる。サラにこんな闇は似合わない」

「でも、なぜ？ 碧井さんは私を殺しにきたのですよね？」

「サラに惚れてしまったからな」

「えっ？ えええええ！」

ビックリした顔をするサラ。そんなサラに俺は顔を近づける。サラは抵抗しなかった。そのまま俺はまだ涙で濡れるサラに口付けた。今までも幾人かの女と唇を合わせ、身体を重ねたが、ここまで心をこめたキスは初めてだった。完全にハマってしまった。光の下で華やかに過ごす人間と闇の中でさまよう人間、交わるはずもないのだが、人生こんなニアミスも起こるから面白い。名残惜しげに唇を離すとサラが俺を見つめていた。

「キスは報酬の前払いということでもよろしくな」

サラは、ほほを赤らめて頷いた。

俺は車道に飛び出し、無理やりタクシーを止めた。

「馬鹿野郎！ 轆かれたいのか！」

50過ぎくらいの運転手が怒鳴る。俺はそれを無視してサラをタクシーに押し込む。

「サラ。ここで別れだ……」

「碧井さんも一緒に」

「言っただろ。サラに闇は似合わない……そして、俺にはあんたはまぶしすぎる。大丈夫、今夜で全て片をつけるよ」

するとサラは首にかけていたきれいな緑色の石が付いたペンダントを俺の首にかける。

「お守りに。翠銅鉱<sup>ダイオプテース</sup>。この石には『再会』という石言葉があります。必ず返しに来てください。待っています」

「ああ、必ず返しに行くよ」

別れにもう一度だけ口付けた。

俺は、運転手に5万ほど握らすと、「帝都ホテルまでノンストップでいってくれ」と頼んだ。運転手は「おう、まかせな」と急発進して目の前の赤信号を無視して見えなくなる。とんだカミカゼタクシーだ。

「さて、決着を付けに行こうか」

俺は一人呟いた。

俺の足元には何人かの男たちが転がっていた。死んではいない。

縛られたり、気絶しているだけだ。すぐそばのテーブルの上には男たちから取り上げた武器がつまれている。密輸品の黒星と呼ばれるトカレフやらメッキされた銀ダラ、007の映画で使われたワルサーPPKに同社のP99、グロックに米軍正式拳銃であるベレッタM92も数モデル含まれている。拳銃の見本市会場じゃないのだが

……

俺は取り上げた武器の中からスミス&ウェッソンM36の2インチモデルを取り出した。一般的にはチーフスペシャルと言ったほうが通りがよいだろうか。回<sup>リボルバー</sup>転拳銃だ。

弾層を解放し残弾を確認するとちゃんと5発（全弾）収まっている。一度、全弾抜いてから1発だけ込めなおすと近くにいた1人の男に近づくと

「さて、念のため雇い主を吐いてもらおうか？」

男に尋ねるが、どうやらしゃべるつもりは無いらしい。こちらを睨み付けるだけだ。

俺はチーフスペシャルの弾層を一気に回す。いくなればロシアンルーレットだ。そして無言で男の股間に銃口を向け、無言のまま引き金を引いた。

カチツと引き金が落ちる。不発。微かに男の表情に安堵が浮かぶ。  
「もう一度聞く。雇い主は誰だ？」

1秒、2秒、再度引き金を引いた。またもや不発。

「雇い主は誰だ？」

今度は間髪いれず引き金を引いた。不発。倒れている男の腰周りに水溜りができアンモニア臭が漂ってくる。後の確立は二分の一。

今度は何も言わなかった。男の目をチラッと見たただけ。引き金に掛けた指に力をこめる。

「い、言うからやめてくれ」

男の股間から銃口をはずす。

「この際、時間は黄金より貴重だ。知っていることを全て吐け」  
俺は男の尋問を始めた。

第五話 王女と狼の遁走曲（フーガ）（後書き）

今回もお付き合ひありがとうございます。

私が花言葉とか石言葉が好きで、よく小説に絡めるのですが、今回は9月17日の石、すいとんじょう翠銅鉞、フルイッシュユグリーン英名 ダイオプテースdiopaseをつかいました。透明感のある青緑色の美しい石です。石言葉は再会。

作中ではペンダントにしていますが、実際はアクセサリに加工されることはあまりなく。掘り出されたそのままの形か、稀に観賞用として加工されるくらいだそうです。（加工なしの石だと4、5千円ぐらいから買えるようです）  
検索かけますと簡単に画像が見れます。

では次回「第六話 狼の戦闘歌」いくくつたでお会いしましょう。  
更新はたぶん水曜日の夜になるかと思えます。

第六話 狼の戦闘歌（いくさうた）

男たちの尋問を終えた俺は、仲介屋の速水真琴はやみまこいを呼び出すと10分ほどで真琴は指定の場所にやってきた。真琴の車の助手席に乗り込むと真琴が謝ってくる。

「ごめん。私の調査不足ね」

「いいさ、そのうちに返してもらおう」

俺の言葉に真琴が不思議そうな声をする。

「何かあったの？ いつもならもっと」

「別になんでもない。それで、ミスターバーゼルたちのアジトの場所は調べがついたのか？」

「ええ、横浜よ。住宅地から離れているから、多少ドンパチしても問題ない」

「装備は？」

「後ろに入っているわ」

俺はタバコをくわえ、火をつけた。

「あれか？」

俺たちの300メートルほど前には鉄筋コンクリート製の3階建ての建物があった。あまり広くはなさそうだが。

「あの建物の地下階よ。上は全部一般の個人企業」

「は？ シーリアの情報部だよな？」

「でも、やっていることは反逆罪、人員も限られるわ。私が調べたところ4人よ」

俺は真琴が手に入れた見取り図を広げる。地下への入り口は一つだけ、奇襲を受けたら敵を倒さない限り脱出もできない。脱出ルートも無いとは日本に来て腑抜けているのではないだろうか？ まだやく

ぞのほうがセキュリティに気を配っているだろう。

「それで武器は？」

「はい、これ」

俺は真琴からかばんを受け取り開くと、中からH&K社のMP7ヘッケラホがでてくる。おいおい強力すぎるぞ。

H&K MP7はドイツの対テロ特殊部隊、Grenzschuttzgruppe 9 (グレンツシュツ・グルツペ・ノイン)、略称、GSG9 (ゲー・エス・ゲー・ノイン)にも採用されているビ・デー・ダブリューPDWだ。PDWは、Personal Defence Weaponパーソナルディフェンスウエponnの略で、日本語では個人防衛火器と訳される。試したことはないが200メートル離れた的に命中する集弾性能があるといわれている。個人が違法に入手するには並大抵の苦勞ではないはずだ。

「スコピオンあたりで十分な気がするが？」

「新しく入手したモノだし、使ってみたくない？」

「使うのは俺だけだな」

真琴が彼女の愛銃、ベレッタM1919を太ももの内側に隠されたホルスターから抜く。その姿はえらくセクシーだったりする。

M1919は、1919年に登場したかなり古い銃で、口径25ACP、装弾数8+1でストッピングパワーでは現在主流の9ミリに劣るが、護身用としては最適だ。007のボンドも初期には使用していた。あまりポピュラーな銃でない、ガンマニアの真琴の趣味だ。

「ついてくる気か？」

「もちろん。バックアップくらいできるわよ」

こうなったら、何を言っても無駄だ。俺は無言で歩き出した。

地下にはいくつかの部屋があったが、人の気配がするのは一番奥にある部屋だけだった。

このドアの前に来るまで、見張りもいなければ、監視カメラも無い。真琴によれば、先月に借りた今回のための仮アジトらしいので監視カメラは無いにしても、見張りぐらい立てるといいたくなる。真琴に目で合図するとうなずく。俺はドアの取手と蝶番ちようつがいに弾丸を撃ち込むとドアを蹴破る。

中には男の人影が3つ、銃を抜いているのがすでに一人いたが、まわすMP7の引き金を引く。男の放った銃弾が肩を掠めるが、MP7が弾切れになる頃には三人とも床に倒れて動かない。床に弾の切れたMP7を置きCZ75を抜く。男たちの生死を確かめるため近づくと「土郎!」という真琴の叫びが聞こえた。

状況を確認せず、床に飛び込むようにして伏せると同時に銃声が2回響いた。2回目は真琴のM1919の銃声だ。顔を上げると手を押さえてうずくまるバーゼルの姿があった。俺が突入したときは机の下にでも隠れていたのだろう。真琴の銃の腕も捨てたものじゃない。

「よう、ミスターバーゼル」

俺はバーゼルの貧相な面にCZ75を突きつける。

「待て、ミスター碧井。話し合おう。違約金ならいくらでも払う」

「では、黒幕を全て吐いてもらおうか」

「そんなことできるわけ無いだろう」

俺も期待はしていない。それに結果を変えるつもりも無い。

「サラだけでなく、俺と真琴の始末まで命じたのだろうバーゼル?」

「わるかった。だから命だけは」

「じゃあな」

俺はCZ75の引き金を引いた。

第六話 狼の戦闘歌(いくさうた) (後書き)

読んでいただきありがとうございます。

五話、六話はかなり趣味に走ってしまい。銃火器の名前がてんこ盛りです。

本当は今回のようにドアを蹴破って突入するときには、ショットガンでとって部分を吹き飛ばすらしいですけどね。その辺の突っ込みはご勘弁を。

次回の更新ですが、仕事の都合で来週の火曜日あたりなると思います。

では次回「王女と狼の別れ歌」でお会いしましょう。

第七話 王女と狼の別れ歌

昨日は散々な日だった。世間知らずのお姫さんに振り回されて夜中の鬼ごっこに、依頼人へのお礼参り。だが着手金はいただいていたから損は無いらしい、それに報酬が美女の唇というのも悪くはない。

帝都ホテルのロビーのテレビの中にサラがいた。俺は足を止める。このホテルの上階で開かれている記者会見のライブ映像らしい。

「サラ王女、昨日ハードスケジュールを嫌って、行方をくらませたとの情報もあるのですが何処にいかれたのですか？」

「はい、お台場とか渋谷とか行きました。お寿司も食べました。日本酒も美味しかったです」

「ずいぶんと、楽しんでようですね。日本はいかがでしたか？」

「そうですね。おばあ様に聞いた通り素晴らしい国でした。それにとっても素敵な男性と一日を過ごせて…… 最高の思い出を作ることが出来ました」

テレビの中では、サラの爆弾発言に大騒ぎだ。俺は苦笑を浮かべた。それじゃ誤解されるだろう。TVに移ったサラはどこか遠くになった気がした。いや、元々この距離が当たり前の距離なのだ。本来なら交りあうことも無い運命なのだから。昨日の出来事は神のいたずらだろう。ただし神というものがいればの話だが。

俺はTVの前を離れて、コンシエルジュデスクへ向かう。

「これをサラ王女に渡して欲しいのだが」

俺はコンシエルジュに翠銅鉞ダイオプテースのペンダントと数枚のDVDを渡す。DVDの中身は、真琴が敵のアジトからサルベージした今回の事件の黒幕に関する情報だ。今回の事件の大まかな顛末と真琴が独自に得た情報も添付してある。これだけの情報があれば、黒幕を特定することも可能だろう。

「あの、そういうことは」

そのコンシエルジュは断りの言葉を途中で止めた。

「碧井士郎様あおいしろうでいらっしやいますでしょうか？」

「そうだが？」

「サラ王女様が、碧井様がいらしたら、お会いしたいと申し出ております」

会いたい気持ちはもちろんあったが、再度ペンダントとDVDを渡すようお願いしてホテルを出た。

「セバスチャン。碧井さんを探すことはできないのですか？」

私は必死に訴えるが、セバスチャンは首を横に振るばかりだ。

「その碧井様の情報はどれも事実でした。もうサラ様を狙うことも無いでしょうが、たとえ反逆者とはいえ、彼はわが国の諜報員を殺害した容疑者でもあります。日本の警察には話してはいませんが、サラ様が彼の身が心配であるなら何もしないほうが宜しいでしょう」

「そんな……でも、碧井さんは私を助けるために……」

私はソファアーの上に腰を落とした。

私、会いたいです。碧井さんに…… たとえ住む世界が違う人といわれても、私はもう一度、碧井さんに会いたい…… 碧井さん、私たちはもう会えないのですか？

翌日、俺はお台場海浜公園でレインボーブリッジを見上げていた。寒さのためか人影はまばらだ。

今日、サラは帰国する。出発の時間まで後1時間ほどだろうか。携帯電話の古いジャズの着メロが鳴り響く。相手は仲介屋の真琴だ。

「おう、どうした？」

「土郎、大変」

珍しくあわてている様子の真琴が、俺の気を引き締める。

「何があつた？」

「サラ王女に渡したデータを整理していたら、バーゼルのやつ、もう一人殺し屋を雇っていたみたい。ジャツカルって知っている？」

「ああ、狙撃専門の殺し屋だ」

その暗殺成功率は99パーセントとも言われている。7・62ミリNATO弾を使用するレミントンM700を愛用する日本裏社会では屈指のスナイパーだ。

俺は、ジャツカルの名を聞いた瞬間、駐車場に向かい歩き始めていた。

「入金済みになっている。この場合、依頼者が死んでも決行すると思っ？」

「俺なら破棄するが。ヤツならやるだろうな」

「どうする？」

「もちろん阻止するさ」

俺はさも当然のように言うが、これはプロとしてではなく個人的な感情だ。第一、暗殺を阻止するよう依頼があつたわけでもない。

「サラ王女に惚れたの？ 土郎」

「そつだな。惚れた女くらい守るさ」

「それが誰にも知られることが無くても？」

俺は真琴の問いかけに答えず電話を切った。

時間が無い。俺は滑走路にフェンスをぶち破り車ごと突入した。

ターミナルビルまでの距離は約2キロ。止めた車のトランクからすばやくバレットM82A1を取り出す。

バレットM82A1は、バレット・ファイヤーアームズ社の大型アンチマテリアルライフルマテリアルライフル対物用狙撃銃でその有効射程距離は2000メートルにも達する。

俺は伏射の姿勢を取り高倍率の単眼鏡を覗き込む。

どこだ？ ベストショットを狙うとしたら、ジャツカルにもそれほど選択肢は無い。サラの乗り込んだリムジンはもう飛行機の元にたどり着いている。時間的にはワンチャンスのみ。

見つけた！ 遮蔽物があるためジャツカル自身は確認できないが、あの銃身はレミントンM700のものだ。

思ったより風が出ている。ジャツカルもサラの姿を捉えているだろう。焦るが、レミントンの銃身に確実に当てないと終わりだ。俺の腕で当てることができるか？ 口の中が乾く。

その時、チャンスがやってきた。一瞬の無風状態。俺が引き金を引くと、単眼鏡の中で、レミントンM700が吹き飛ぶのが見えた。「よし！」

思わずガッツポーズを取るが、派手にフェンスをぶち破ったのだ。グズグズしてられない。バレットM82A1をトランクに収め、逃走する。

俺は一度だけ、サラの乗る飛行機を見た。もう二度と会うことも無いだろう。だがあの日は裏社会に漬かってから初めて楽しいと思える時間だった。

「サラ…… 元気でな」

つぶやいた俺は、タバコをくわえ火をつけた。

私たちが飛行機に乗り込むと同時に、護衛に付いていた警察があらわたくしく動き出す。セバスチャンが言うには、フェンスを突き破って滑走路内に進入した不審車があるそうだ。

私は碧井さんが来たのではないかと期待したが、その車はすでに逃走したらしい。

「はあ」

「サラ様。いい加減にあきらめなさい」

私のため息を聞いたセバスチャンが、昨日から何度も聞いたセリフを繰り返す。昨日まで、いいえ、先ほどまで無視していたが今回はセバスチャンに向き直った。

「いいえ、あきらめません。私はまた日本にやってきます。そして、碧井さんを見つけて見せます」

その言葉を聞いたセバスチャンは、肩をすぼめただけだった。

碧井さん、必ず見つけて見せますから、また東京を案内してくださいね。

END

第七話 王女と狼の別れ歌（後書き）

最終話までお付き合いいただきありがとうございます。

オリジナルとまったく違う結末（ボツにした複数のエンドとも違います）になりましたがいかがでしたでしょうか？

最後の最後にサラを少しだけ強くしてみました。作者としてはサラ王女に碧井君をぜひ見つけて欲しいです（笑）

真琴ちゃんは、碧井君ともうちよつと深い関係にするつもりだったのですが、ただの相棒になってしまいました。

彼女も使い捨てにするにはもったいないキャラなので、気が向いたときにでも他の作品で登場させても見ようかと思ってます。

さて、またどこか別の世界の物語でお会いしたいと思います。本日はありがとうございました

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8921c/>

---

王女と狼の騒動歌 改訂版

2008年8月29日19時31分発行